

山が燃える日

藤田圭雄

少年少女現代日本創作文学 4

山が燃える日

定価 五五〇円

昭和四十四年五月二十八日 第一刷発行

著者 藤田圭雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一

郵便番号 一一二

電話 東京(942)一一二一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 共同印刷株式会社

製本所 株式会社 大進堂

©藤田圭雄 昭和四十四年

N.D.C. 913
176p. 23cm

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

少年少女現代日本創作文学



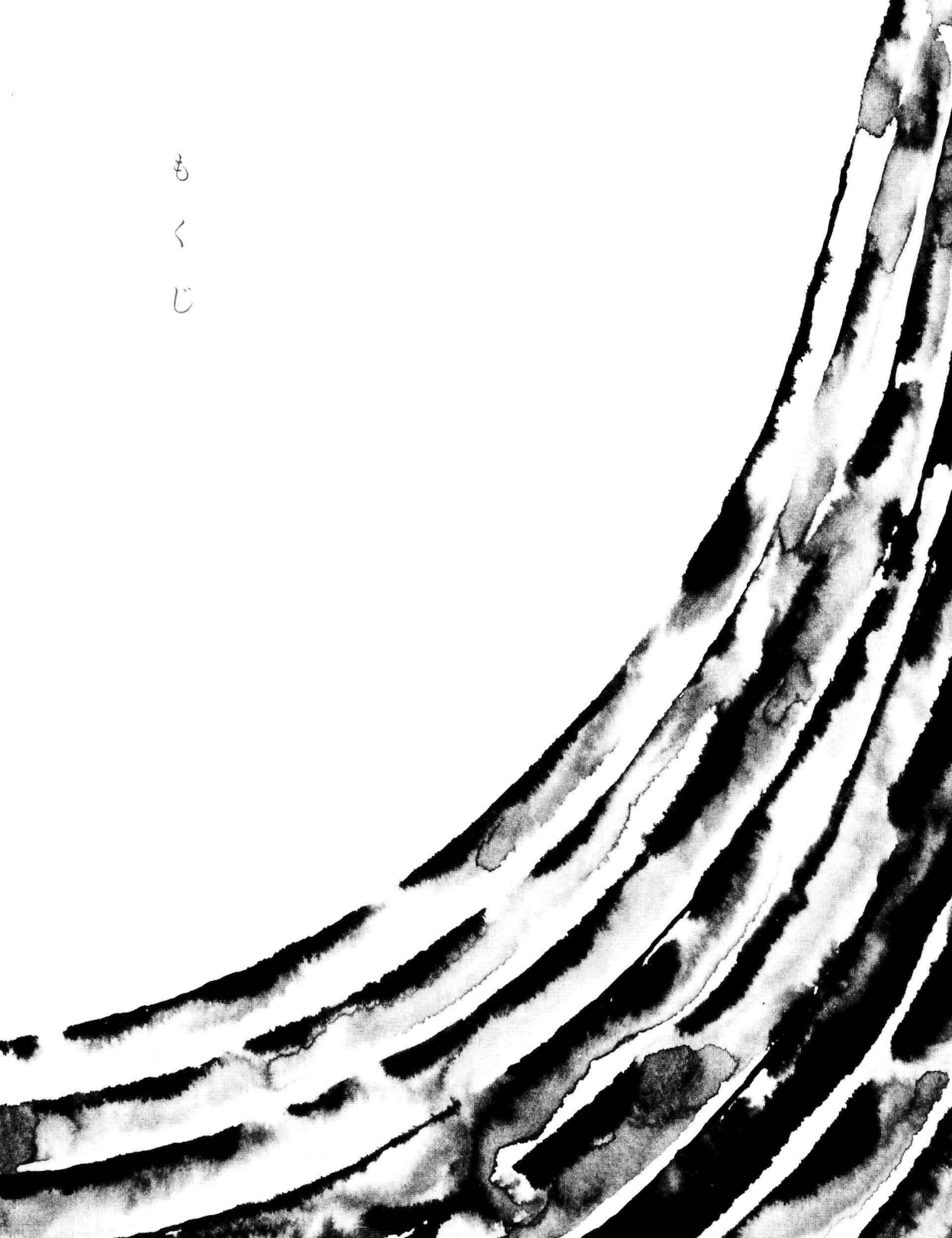
山が燃える日

藤田圭雄 作

朝倉 摂 絵



も
く
じ



夏の一夜……………10

空を飛ぶ機械……………28

世界地図……………47

ある日の平賀源内……………54

蘭学の勉強……………66

源内、人を殺す……………79

虚無僧寺の生活……………95



思わぬ人の死……………110

秩父鉦山……………117

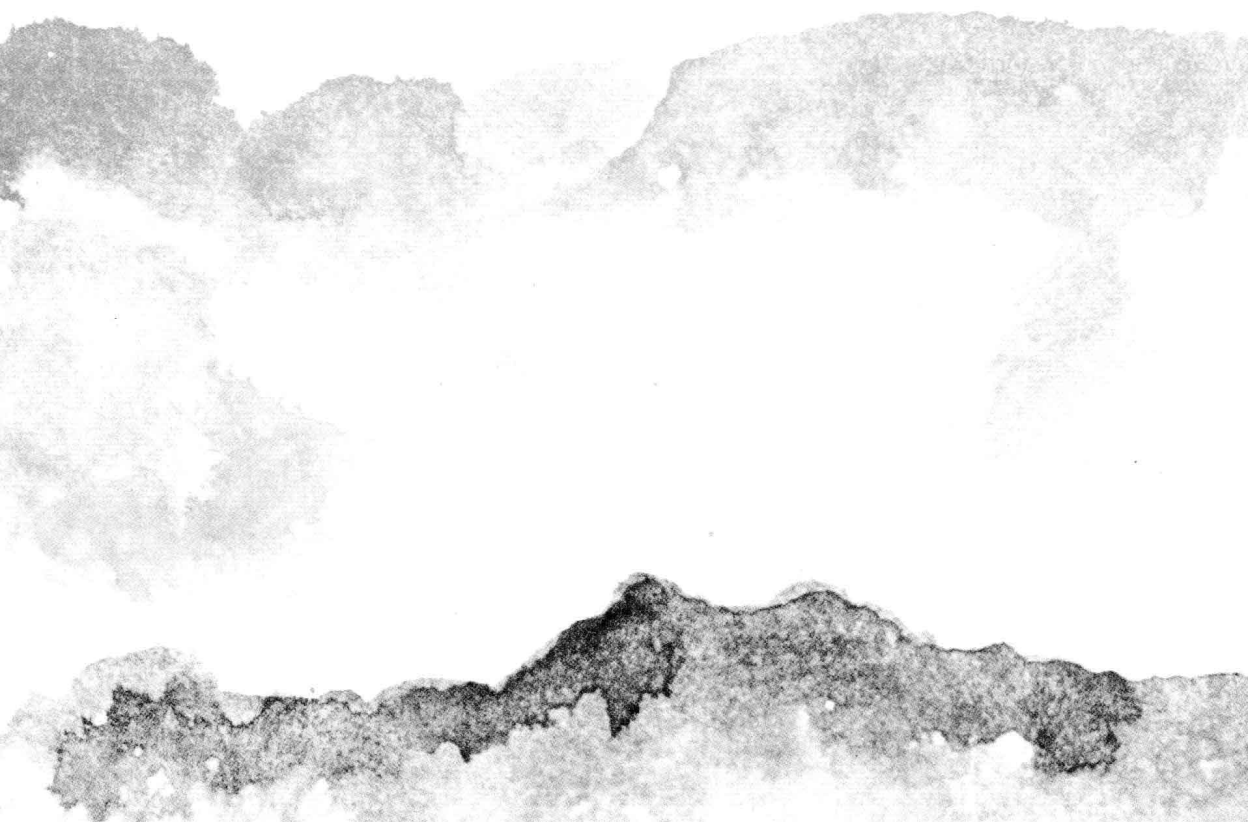
とねの推理……………137

尺八の音……………144

湯の丸の小屋……………159

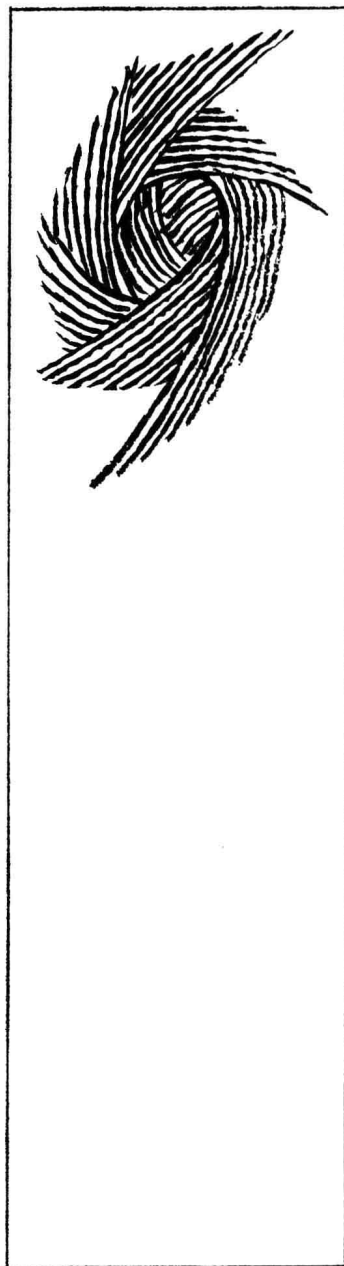
天明三年七月八日……………166

あとがき……………181



山が燃える日

夏なつの一夜や



強い夏なつの日ざしは、白い地面じめんに反射はんしゃして、ぐらぐらするような熱気ねつきを、あたりいちめんにまきちらしていた。

長いあいだ、雨あめがふらないので、木の葉はも草くさもすっかりかわききって、手をふれれば、カサカサと、くだけちりそうだった。ひまわりだけが金属性きんぞくせいの花弁かべんをびんと立てて、ふといくきの上で太陽たいようをにらんでいた。

そのかげによりそうように、とうもろこしが十二、三本、乱雑らんざつに植うえられていた。なかには、もう、ぎっしりとみのって、いまにもはじけそうにふくらんでいるのもあった。

そのとうもろこしをかきわけるようにして、ひとりの小ぼうずが顔かおを出した。

白い僧衣そうえの上に、まんまるな顔かおがのっかっている。その顔かおは日にやけて赤銅色しゃくどういろだが、ほっぺただけはとくべつ赤い。頭かたまはそりたてなのかまっさおで、そのためか、ふつりあいにくらんで見える。わらぞうりの足で、とうもろこしのくきをけとばすようにして、とび出してきた。

そこは、ちょうど、寺てらのうら手にあたるところで、小さい屋根やねのついた井戸いどが、そこだけすずしいかげをつくっていた。

とうもろこしから井戸いどばたままでは、約十歩やくじゅうほほどである。いきおいよくとび出してきた小ぼうずは、ぎよつとしてそこで足をとめた。

井戸いどばたに、ひとりの武士ぶしがいたのである。

こちらに背せをむけて、車くるまつるべのつなをたぐりあげているので顔かおは見えないが、がっちりとした、はばの広いせなかは、見ただけで、なんだか、わかくて、強つよそうな感じかんじがする。旅たびをつづけてきたらしく、きやはんとわらじは、ほこりにまみれてまっ白だ。井戸いどばたには、すこし日にやけたかさの中に、小さな荷物にもつと手甲てっこうが、大小といっしょにきちんとそろえておいてある。

武士ぶしは、もろはだをぬいで、白いじゅばんをこちらに見せている。そのじゅばんが上下にゆれて、ギーとつるべのつなをきしませている。

やがて、たぐりあげたつるべを井戸いどわくの上におくと、顔かおをその中につっこんで、からだ全体ぜんたいを波なみうたせながら、ゴクゴクと水をのんだ。

「ああ、うまい。」

つるべから顔かおをはなすと、思おもわず武士ぶしはそうつぶやいて、もういちど、つるべをおさえている左手に力

をいれた。

そのとき、

「おさむらいさん、たらいをかしてあげようか。」

そこへ出てきた小ぼうずが、井戸^{いど}ばたのわかい武士^{ぶし}に声^{こゑ}をかけた。そして、庫裡^{くら}（寺^{てら}の勝手口^{かたてぐち}）から大きなたらいをはこんできた。

「いや、これはすまん、かたじけない。」

すずしい音^{おと}をさせて、つるべの水を五、六ばい、たらいの中にあけると、武士^{ぶし}は、じゅばんをぬいで、顔^{かお}からパシャパシャと、気持^{きもち}ちよさそうに水をはねかせた。

「はい、手ぬぐい。」

小ぼうずは、ひととおりのサービスをおえると、たのしそうに武士^{ぶし}の身^みづくろいに見^みとれていた。

武士^{ぶし}はなんべんも手ぬぐいをしぼって、からだじゅうをふきおえると、やさしい目で小ぼうずにわらいかけた。

「かたじけない。おかげで、さっぱりした。」

「おさむらいさん、どこからきたの。」

小ぼうずは、武士^{ぶし}のまわりをとびまわるようにしてきいた。

「あっちからさ。」

武士^{ぶし}はそういつてあかるい声^{こゑ}でわらった。

「いじわる。」



小ぼうずは武士にむしゃぶりついていった。不意をつかれて一、二歩たじたじとして、武士は、がっかりと小ぼうずをくみとめた。

「おっ、ぼうず、強いぞ。」

「ぼうずっていうんじゃないよ。三吉っていうんだ。」

小ぼうずは、武士のはかまの結びめのあたりに頭をこすりつけてさげんだ。

「だって、頭も着物も、ぼうずじゃないか。」

武士は小ぼうずのかたをおさえて、つりあげるようにしていった。

「わたしはね、ほんとはぼうずなんかきらいなんだ。でも、頭をそらないとお住持（住職ともいう。寺をあずかっている僧のこと）さまにしかられるから。」

「お住持さまって、鉄心おしよることか。」

武士はそういういながら、小ぼうずのかっこうのいい頭をなでまわしていた。

「よせよ。」

小ぼうずは、武士の手をはらいのけた。

「ははは、ごめん、ごめん。」

小ぼうずは二、三步はなれると、あらためて武士の顔をじっとみつめた。

「おさむらいさん、お住持さまを知っているの。」

「うん、おしようにお目にかかりにきたのだ。おしよはご在宿（家にいること）かな。」

「うん、おいでだよ。」

「それでは、とりついでもらおうかな。」

「おさむらいさんは、なんていうの。」

「江戸から、浦上志麻之介がまいったともうしあげてくれ。」

「江戸の浦上志麻之介さんだね。」

「うん。」

「よし、ちよいと待っていてね。」

小ぼうずは、庫裡の入り口にかけよると、そこにさがっている細いつなを二、三回、強く引いた。

わかい武士は身づくろいをし、大小をこしにさしながら、ちよつとふしぎそうな顔つきで、小ぼうずのすることを見ていた。

小ぼうずは、つなを引きおわると、武士のほうをふりむいて、どうだというような顔をして、うれしそうにわらってみせた。

しばらくすると、庫裡の戸があいて、くらやみの中から、まっ白なあごひげを長くのばした老僧が顔を出した。

「お住持さま、江戸の浦上志麻之介さんがお見えです。」

小ぼうずは、ていねいに頭をさげた。

「おう、おう、志麻之介どのか。ずいぶんひさしいのう。」

「ご老師にもご健在で。」

「ささ、まあ、なにはともあれ、こちらにおはいり。これ、三吉、おはきものをあげるのだ。」